

「紅蓮」ぐれん
改め

りりん

かぶらやこうし
鏑谷 嚙矢

その浪人は、身の丈は六尺近く、痩せている上に、なぜか首に朱色の布を巻いていた。

——こいつあ、まるでかんざしだ。

初めてみた時、咄嗟に辰蔵はそう思った。

「それがしに、なにか」

浪人は、そういいながら辰蔵に一瞥をくれ、しばらく間をおいて、さりげなく続けた。

「御用かな、十手持ちの親分」

言葉に少しなまりがある。

顔も色黒で面長な上に、顎が張っているため、武士というより百姓といったほうが似合いそうだが、この男は、見かけよりずっと良く回るあたまを持つているようだった。

——なかなか喰えねえ男だ。俺が、見えねえように帯の下に隠してある十手を目聡く見つけやがった。

そう思いながら、

「いやいや」

辰蔵は、ゆっくりと首を振って、

「今日は、そんな野暮用じゃねえんですよ。これ、これのことなんです」
そういつて歯を剥き出しにした。

だが、その仕草の意味を男は理解できなかったようだ。

「それは」

不思議そうな顔をする男の前に、歯を剥きだしている自分が滑稽に思え、あわてて辰蔵は口の前でばらばらと手を振った。

「これ、これですよ」

だが、男は、まだ辰蔵の仕草に合点がいけない様子だった。

十手持ちである辰蔵だが、その浪人のもとを訪ねたのは、別に詮議の沙汰があるわけではなかった。

ごく小さく些少なもので、有り体にいうと爪楊枝を求めてきたのだった。

どうも、辰蔵は歯性が悪いらしい。

らしい、というのは、自分では、それと分かっていたからなのだが、そのことを、最近、辰蔵は、小間物屋「三善屋」のおかみ、おみつによって教えられた。

「辰さん、あんた、しまいにや歯に殺されるよ」

怖い声で、おみつは、そういつたのだった。

この艶っぽい小間物屋の主は、五年前、三十二の歳に卒中で亭主を亡くしている。

一年前に、娘に婿も取り、商いのほとんどを若夫婦に譲り渡した形をとりながら、その実、店の実権は握ったまま、毎日を芝居見物などをしつつ気ままに暮らしているのだ。

おみつの亭主の松助というのが、辰蔵の父親とは幼なじみだった。

お上の御用を引きつぐ気もないまま、ぶらぶらとその日暮らしをしていた若い頃、辰蔵は、よく三善屋の二階にやっかいになったものだった。

当時、まだ独り者だった松助は、我が子のように辰蔵を可愛がり、ことあるごとに父親とぶつかって家を飛び出たきた辰蔵を快く迎えてくれたのだった。

松助がいなければ、今の俺はなかっただろう、少なくとも岡っ引きとしての俺はここにはいない。

折に触れ、辰蔵はそう思っていた。

曲がりなりに、「睨みの辰蔵」と二つ名をとる岡っ引きになれたのは、親父よりは松助の影響が大きかった。

だからこそ、松助が、突然、辰蔵とあまり年のちがわないおみつと祝言を

あげた時には、親父ともども大いに驚いたものだった。一代で、大きな身代しんだいを築き上げた松助は、店を大きくすることが楽しくて、それにかまけている間に年をとってしまい、嫁をもらうことなど、とうに諦めたと思っていたのだ。

それが証拠に、松助は、その八年前に店の前に捨てられていた、お八重という女の子を自分の子供として育て始めていたのだ。

松助がおみつを嫁に迎えた頃には、辰蔵も観念かんねんして親父のあとを継ぎ、十手取りてと縄なわをとるようになっていたため三善屋へもあまり顔を出さなくなっていた。

辰蔵自身は、親代わりとも思っていた松助が、年老いてから惚れぬいた挙げ句、嫁に迎えたおみつを嫌いではなかった。

というより、初めておみつを見たとき、その、背の高い、頬から首への線の美しい娘の、しんの強い美しさに心を打たれたのを今も覚えている。

だが、なにぶんにも辰蔵は、おみつと年が近すぎた。

他人ひとさまの、しかも恩人の女房に、なれなれしくする訳にはいかない。

それゆえ、たまに店を訪ねても、挨拶はするものの、ほとんど話らしい話もせずに年月としつきを過ごしてきたのだ。

辰蔵が、おみつと言葉を交わすようになったのは、松助が卒中そつちゅうで倒れて寝たきりになってからのことだった。

その頃には辰蔵も父親を亡くし、すっかり岡っ引きとして一人前になっていた。

ふと気づくと御用繁多ごようはんたにまぎれて嫁ももらわず、身内らしいものといえ、松助ひとりであることに気づいた彼は、毎日、親孝行のまねごとと、松助の見舞いに通い始めたのだった。

あるいは、それは、ある朝目が覚めると棒きれのように冷たくなっていた父親に対して果たせなかった親孝行を、松助にしたいと思ったからかもしれ

なかった。

見舞いがてら話をしてみると、美しさは昔と変わらぬものの、年を経て培われたおみつのくだけた考えと気っ風のよさを辰蔵は大いに気に入った。

それは、自分が先に逝くことを充分に承知していた松助が、おみつを自分の跡継ぎとしてしっかりと店の者に示しつつ、商いのいろはを一から教えた結果でもあった。

以来、半年後に松助が死んでも、辰蔵は御用廻りの合間にちよくちよく三善屋へ足を運んでは、当たり前障りのない世間話をするようになった。

小間物屋、特に三善屋のように値が高すぎず安すぎず、上質なものを多く揃えている店には女客が多く集まる。

江戸の町の噂ばなしは、女たちの間を韋駄天の速さで伝わるものだ。

男どもが隠しておきたい秘密も、我知らぬまま寝物語で話すうち女を通じて世間に漏れていく。

安く上質の小間物に、きつく閉じた財布を開ける時、女たちは普段はきっちり張っている気持ちをつかりと緩めてしまい、つい隠し持った秘密も漏らしてしまうかのようだった。

そんな秘密こそ岡引には必要なのだ。

聡いおみつは辰蔵の思惑を察してか、さりげなく客に水を向け、町の噂を集めて、時折、店にやってくる辰蔵に教えてくれている。

もちろん、辰蔵は、いらぬ噂を立てられぬために、おみつと二人きりで会うことなどしない。

いつも番頭丁稚のいる店先の隅のほうで、客の邪魔にならないように、小声で話をするだけだった。

このあいだも、いつものように三善屋に行き、世間話をするうちに、命日が近かったせいもあって自然と松助の話になった。

珍しく座敷に上がらせてもらった辰蔵が、仏壇に手を合わせていると、おみつが茶を運んできた。

「お、麦湯か。気が利いてるな」

「暑くなると欲しがりますからねえ」

「そうか」

三善屋は小間物屋としては珍しく、お抱えの職人を何人か雇っていた。

おそらく、その職人たちのために、おみつは麦湯を作っているのだろう。

子飼いの職人が三善屋の売りのひとつだった。

三善屋で買ったものも、そうでないものも、もし壊れたなら、店にもってくれば安い手間で修理してくれるのだ。

壊れたり欠けたものを、できるかぎり早く安く元通りにしてやりたい、そして客が望む品物をどんどん作って使ってもらいたい、そんな松助の気持ちが、損を承知でそういった商いをさせていたのだ。

三善屋、一番の名物は、一本一本の櫛が普通のものより薄く長い都祁の櫛だった。

これなら、髪の毛の薄くなった老人でも簡単に髪にとめることができる。

辰蔵は、目を閉じて、しばらく麦湯の香ばしい香りを楽しんだ。

「あんなに達者だった親父さんが、ぼっくりいくとはなあ。病とは恐ろしいもんだぜ」

「本当だねえ。あたしも、あの人があんなに早く死ぬなんて思ってもみなかった。そうと知っていたら、早めにあの人の子を産んでおいたのにねえ」

おみつはしみじみといった。

「おう、おみつ」

辰蔵は、なじむような声音でいった。

「ええ、ええ、親分。わかってますよ。そりゃ、お八重はいい子ですよ。でもね。そこはやっぱりなさぬ仲。なにかと話のあわないことも多いんですよ」

「そんなことはないさ。俺なんざ、嫌ってほど親父とは、『なした』仲だつたがよ。結局、死ぬまで話は合わなかったぜ」

おみつはそれを聞き流して続ける。

「それに子供ってのはね。ほんとに小さい頃を知ってないと駄目なんじゃないかねえ。小さくて、ああ、あたしが側にいて守ってやらないと、この子は生きては行けないんだ、そう思う時がないと」

「おめえがこの家に来た時、お八重はいくつだった」

「八つでしたよ」

辰蔵は頷いた。その年なら、自分が守ってやらないと死んでしまう、という気にはならないだろう。

「だがな、おみつ」

「わかってますよ」

辰蔵の言葉に、おつかぶせるようにおみつがいった。

「あの子はいいい子です。いえ、うちのひとも、あの子がいい子だったから、自分の子にしたんでしょう。それはわかっています」

「お八重と何かあったのか？」

はっとしたようにおみつは顔をあげた。

「あらいやだ。何もありませんよ。あたしは、なんだってこんな話を辰さんにしたんだろうね。あの人の命日が近いから気が弱くなったのかね」

「おいおい、弱気はいけねえぜ。俺たちだって、いつ、ぽっくりいくかわからねえ年になっちまったんだからな」

「あんたは大丈夫。殺したって死なない頑丈な体なんだから」

「いや、それがそれでもねえのよ。体はいたって丈夫なんだが、どうも目のほうがいけねえ。近頃はすぐに目が疲れちまってなあ。目病めやみ女かぜに風邪かぜひき男かぜっていうのは確かに色っぽいが、男の目の悪いのには色気もなにもありやしねえ」

まだ四十になるには二つ三つあるというのに、辰蔵には持病があった。肩こりが尋常でないのだ。

肩だけでなく、首の後ろ全体が石のように固くなって張り、そうなるのももの見づらくなり目がかすんでくる。

辰蔵がそういうと、おみつの目が、にわかにつきつくなった。

「辰さん。それはそのままにしちゃいけないよ」

うちのひとは同じようなことを言い続け、ただの疲れだろうと思っているうちに卒中で倒れたのだ、そうおみつはいった。

普段なら、なにを馬鹿な、と一笑に付したに違いないが、つい先達で、懇意にしていた酒屋の親父が卒中で倒れ、満身に言葉が話せなくなるのを目の当たりにしていた辰蔵は、おみつの勧めもあって、結局、漢方医を紹介してもらうことになった。

翌日、辰蔵は、神田界限でも名医と評判のその医者を訪ねた。

総髪に白髪が交じった寺井千庵という五十がらみの医者は、辰蔵の話聞き、首に手を這わせると開口一番、

「歯を磨け」

ぶっきらぼうな口調でそういった。

歯が悪いと肩と首が凝り、そのあげく目が悪くなるというのだ。本当なのか、と思っではみたものの、医者の見立てを疑ってみても仕方がない。

それに、いわれてみると、甘いものが好きなわけでもないのに、子供の頃から辰蔵には虫喰い歯が多かった。

それがつまり歯性が悪いということらしい。

あまりひどくなると、自ら指でつかんで、ぐいと抜いてしまうのだが、それほど虫喰いがひどくなっていない歯は放ってある。

放置された歯は、時折口の中で思い出したように熱を持って暴れ出し、そうなる辰蔵は夜も眠れなくなるのだ。

虫喰い菌を防ぐには、まめに菌の掃除をしてやらねばならない。そこで、辰蔵は、使いやすい楊枝を探すことにしたのだった。

しかし、いざ探してみると、よい爪楊枝というものは見つからなかった。

辰蔵はすっかり困ってしまったが、人間、思いつめればなんとかなるもので、御用の合間に、人に聞き、尋ね回ったところ、半月後に、とうとう「七房楊枝」という名の爪楊枝の話聞き込んだのだった。

扇形に器用に裂かれたその楊枝を使えば、菌の隅々まできれいにすることができるといえるらしい。

ところが、その七房楊枝が容易に見つからない。

どこを探しても、ああ、確かにあの楊枝は良かったねえ、という話を聞くだけで、本物を見つけることはできないのだ。

作っていた職人が、突然仕事を辞めてしまったためらしい。

だが、蛇の道は蛇、探索が得意の十手持ちである辰蔵は、あちこちに足を運び、しまいには意地になって、ついに卸元を探し当て、七房楊枝を作っていた者の住まいを聞きだしたのであった。

その男は、神田小泉町にある、下駄屋の離れに住んでいた。玉池稲荷のすぐ横だ。

それは、下駄屋の先代が、晩年に、こっそりと妾を住まわせていた部屋で、そういった性格上、裏に回れば店を通らずとも出入り出来る上、部屋のすぐ横には檜の立派な風呂がついているらしい。

今は、先代もすでに亡く、妾も照降町に住む行かず後家の妹の家で、分けてもらった金で悠々と暮らしているという。

それだけのことを、頼みもしないのに卸元はべらべらと喋った。

「いえ、なに、うちも七房楊枝をもう納められないというのには弱ってしまったのですがね。なんせ、先方が今まで稼いだためた金で、どこかに家を借り

て、そこで子供に手習いなど教えたい、と申されましたのでね。そのお住まいは、わたくしどもがご紹介させていただいたのですが」

てらてらと光る食欲そうな男の額や口振りから、口利き料として相当の金子を受け取ったことを辰蔵は感じとっていた。

ともかく、楊枝を作っていた男の住まいが分かったので、辰蔵は、すぐさま小泉町にやってきたのだった。

そして辰蔵は、先ほどから下駄屋の裏木戸の前で、歯を掃除する動きを繰り返しているのだった。

何度か間の抜けた所作を繰り返した辰蔵だったが、一向に、その意味が伝わりそうにないので、あきらめて、今度は浪人に向かって、はっきりと「七房楊枝を作ったのは、あんたですかい」と尋ねた。

とたんに、合点の色が浪人の顔に浮かぶ。

「おお、あれか。そう、そのとおりだ」

「あれを、どうしても分けて欲しいんですよ」

「なるほどそうか」

そういうと、浪人は先に立って家に入り、辰蔵を招いた。

裏木戸を抜けると、離れまで、きれいに水が打たれた飛び石が敷かれてい

る。
歩きながら、男は、矢野新重郎やのしんじゅうろうと名乗った。

辰蔵は、近くで浪人を見上げながら、先ほどの印象が微妙に変わったのを感じていた。

年は三十をいくつか過ぎた頃合いで、少々馬面ではあるが、秀でた額と、きりつとした眉、勢いよく伸びた鼻が頭の良さを示している。

浪人とはいえ、垢じみた感じはなく物腰も穏やかだった。

住まいは、離れとはいえ部屋数も多く、こどもに手習いを教えて住まうに

は充分な広さがあつた。

新重郎は、さあこちらに、と辰蔵を庭に面した座敷に招いて座らせると、文机の下から、小さな木箱を取り出した。

「いや、失礼した。今の仕事につくまで、傘張りから提灯張り、楊枝削りと、いろいろなことをやってきたのでな。すぐには思い浮かばなかったのだ」

蓋をあけると、中には変わった形の薄刃の刃物と七房楊枝が入っていた。

「これであろう」

「ああ、これです。これです。これを譲っていただけで」

相手が浪人とはいえ、辰蔵は、他の十手持ちのような横柄な態度をとらず、丁寧な言葉遣いを崩さない。

「いや、これはほんの見本に過ぎぬもの。よければ、親分には新しく作つてそれをお渡しししよう」

矢野新重郎のほうも丁重な物腰をくずさなかつた。

「あら、お客さまですの」

その時、部屋の内から、声と共に現れた女をみて、にわか辰蔵の首筋に血が上つた。

それほど女は美しかった。

年の頃は二十歳過ぎだろうか。

すらりとした物腰、抜けるように白い肌に黒目がちの大きな目、およそ辰蔵が普段目にする女とは、まるで違う生き物がそこにいた。

おみつもいい女だが、あれはどこまでいったって生身の女だ。

それにひきかえ、目の前の女には、どこか現世のものではない、夢でしか会えないような儂い印象があつた。

「ゆき、この方は辰蔵親分と申される方でな、七房楊枝が気に入って、この家を訪ねてくださったのだ」

新重郎が紹介すると、妻女は丁寧に指をついて挨拶をした。

「初めまして。おゆきと申します」

美貌に似合わぬ、ぴしりと整った武家の妻らしい毅然とした物腰であった。だが、顔を上げ、にっこり笑うと、とたんにうち解けた優しい表情になる。

ああ、観音様が手の届くところまで降りてきなすった、なぜだかわからないが、そんな印象を辰蔵は感じていた。

「あの楊枝を気にいっていただいたのですね。主人が楊枝をもう作らない、と申した時に、わたくしは、あれがなくなつて困る方がきつと大勢いらつしやるといつたのです」

「これこれ」

「だって、本当に、あなたのお作りになる妻楊枝は使いやすいですもの」
そのしぐさ、話しぶりから、ゆきが生まれつきの武家育ちではないことを辰蔵は知った。

「でもね、親分さん。主人の作るものは、楊枝でも傘でも提灯でも、全部職人さん顔負けの良い品ですよ」

「ゆき、うるんなことをいうものではない」

「いえ、あつしは爪楊枝しか知りやせんが、本当に良い仕事をなされてると思いやすよ」

いいながら、この浪人者のつくつた傘や提灯も見てみたいものだ、と辰蔵は思った。

「そうでしょう？」

ゆきが、にっこりと微笑む。

ほんの少し言葉を交わしただけだったが、辰蔵はこの気取らない妻女、ゆきをすっかり気に入ってしまった。

美しいだけでなく心根がいい。

亭主が浪人となり、生計たつきとして楊枝造りや傘張りをしていることを恥じてはいない。

むしろ、夫の技量が職人なみであることに誇りを持っている。

辰蔵は、知らぬ間に、ゆきが持つ独特の雰囲気に惹きつけられていた。

ともすれば、冷たい印象を与えそうなほど整った顔つきであったが、いつも絶やさぬ口元のほほえみが、暖かさと柔らかさを与えており、なんともいい女だった。

しばらく、傘や提灯の使い勝手について話をした後で、近いうちに楊枝を作ってもらうことを約束して、辰蔵は新重郎の家を出た。

裏木戸を出ると、そのまま表に回る。

ちよつと十手をのぞかせて、糸屋の番頭を呼び出し、離れに住む浪人夫婦の話を聞いた。

新重郎に、特に何かを感じたという訳ではない。

ただ、習い性で、新しく知り合った者の身边をつかんでおこうとしただけだった。

番頭の話によると、矢野新重郎の寺子屋はなかなか盛況で、とくに同じ町内の坂町長屋、通称、縁起長屋の子供が多く手習いに来ているらしい。

それも道理で、もともとふたりは縁起長屋に住んでいたのだという。

そこで、縁起長屋の差配を訪ねて話をきいてみた。

矢野新重郎の評判は概ね良かった。

「ただ、矢野様は変人でねえ」

七十はとうに過ぎていようである、皺だらけの顔を大げさに動かして老人がため息をついた。

「なんだ」

「あの方は、奥方を大切にし過ぎるんですよ。まるで壊れ物のように扱いなさる。だのに、おゆきさんときたら、仏様みたいに貧乏人や困った者の助けをしないと、毎日町に出て行くとうしなさるもんだから」

「うむ」

辰蔵はうなずきながらも、差配の言葉に思わず笑いそうになった。

矢野新重郎は、浪人とはいふものの紛れもない武士、だとすれば、おゆきは奥方と呼ぶべきなのだが、いざその人となりを知れば、どうしてもおゆきさんと呼びたくなってしまう。

その気持ちの間で揺れながら、この老人は、奥方とよんだりおゆきさんと呼んだりしているのだ。

「なんせねえ、うちの長屋に住んでいる時、矢野様は奥方を湯屋にすらやらずに、ご自分で湯を沸かして行水ぎょうすいをさせてたらしいんですよ」

「本当かい」

「間違いございませんよ。実際に入っているとところを見たものはおりませんが、長屋の子どもが、障子越しに湯浴みの音を聞き、矢野様が湯を沸かしては土間に運び込むのを何度も見ておりますから」

「夏の間は誰だつて行水するだろう」

「いえいえ。冬でもそうなのでございますよ」

「ほう。それはなぜだろうな」

「りんき愠気でございましょうな」

辰蔵の頭に、かんざしのような新重郎の姿が頭に浮かんだ。

それほどに、あの美しい妻女をひとりじめしたいのだろうか。

新重郎はさっぱりした性格で、とてもそうしたりんきや愠気病みにはみえなかった。

もちろん、辰蔵とて、四十近くまで生きてきて、人と人の世が、きつちり

くろくわく黒白つけかねるものであることは知っている。

「たとえ女にでも妻女さいじょの肌は見せたくないのかね」

「まあ、ひとつには、あの奥方の二の腕にはひどい火傷があるらしいから、それが可哀想だと思いだったのでしょ」

辰蔵は頷いた。

挨拶の時に、おゆきの袖からのぞいた二の腕に、薄くはあるが軽いひきつりがあったことに気づいていたのだ。

「しかし、さすがに差配さんだ。店子のことをよく知っている」

本心から出た言葉であったが、老人は気を悪くしたようだった。

「なにもわたしは店子の詮索せんさくをしようってんじゃありませんよ。矢野様はい店子たなこでしたし、お金をためて、もっといい住まいに移りなされたんだから、あたしには恨みもない。ただ親分がお聞きになるからいったままで」

「そんなつもりでいったんじゃねえんだ。気に障さわったら許してくんな」

五日ほどすると、矢野新重郎自身が神田長谷川町の辰蔵の住まいに、楊枝五十本を届けにきた。

「ああ、矢野様。わざわざお届けくださらなくっても、お声をかけていただければ、こちらから出向きましたものを」

「辰蔵親分、その矢野様つてのはやめてくれまいか。わたしも、もう長い浪々ろうろうの身。このへんで武士など捨てて町人になろうかと思っているとところなのだ」

いいながら、懐から、晒さらし木綿もめんに包んだ楊枝を取り出した。

「さあ、ごらんなさい」

いわれて手にとって見ると、確かにどれも見事な出来だった。

本物を探すうちに、七房楊枝を真似てつくられたものを、いくつか見もし、試しもしたが、いずれももうひとつだった。

だが、本物はさすがに違う。

指の腹で押してみると、数十本に裂かれた竹の一本一本が見事にしななって、心地よい弾力がある。

「見事なものです。これは、やはりあの道具が秘伝なんですかね」

辰蔵は、楊枝の箱に入っていた薄刃の細工刀を思い出していった。

「さすがは親分。あれに目をつけておられたか」

「いや、なに、楊枝の箱の中に入っていたもんだから、あれが楊枝を作る道具だと思っただけさ」

「あれは、前に使っていた小柄こづかを薄く研ぎ上げたものだ。あれならば、地金かねに粘りがあって、竹をきれいに切ることができる。ところで親分」

新重郎は、そこで少しいい淀よどんだ。

「なんです」

「親分は、このあたりのことをよく知っておられるな」

「まあ、そうです」

「それでは教えていただきたい。小間物屋はどこがよいか？」

「小間物屋、でございますか」

「実は、妻に、ゆきに、かんざしを買ってやりたいのだが、わしはその方にはとんと疎いのでな」

あやうく辰蔵は吹き出しそうになった。

最初にこの浪人者を見た時に、その姿がかんざしそっくりだと思ったことを思い出したのだ。

「もちろん、店はいくつか知ってはおりますが、なんせ、このたびのお触れで贅沢品は買えなくなっておりますのでねえ」

辰蔵の言葉に、新重郎はゆっくりとうなずいた。

先年、天保十二年（一八四一年）に老中の座に就いた水野忠邦が、寛政の世に松平定信が行った改革を模して儉約令けんやくれいを打ち出してからというもの、すべてが節約、儉約で、贅沢はお上の手によって取り締まられる世の中となっているのだ。

おみつの店でも、昨年より、珊瑚さんごを用いた高級なかんざしは扱えなくなっている。

「大丈夫だ、親分。それがしに値の張るものなど買えるわけがない。寺子屋

から得る金は、ほとんどが家賃に消えてしまうからの。まあ、有り体あていにいえば、親分からいただいた楊枝代で、久方ぶりに、ゆきに安い玉かんざしでも買ってやりたいと思つたのだ。いや、実際の話、今度のことで、また楊枝作りを始めようかと考え始めているところだな。爪楊枝なら、よもや、お上のご意向に背くとはいわれないだろうからの」

新重郎を三善屋に連れて行くと、すぐにおみつが適当なかんざしを選んでくれた。

「まったく、こんな優しいご亭主を持っていたら奥方は幸せですよ」

おみつの言葉に、柄にもなく照れながら新重郎は紙入れを取り出した。

「ところでおかみさん。支払いのほうだが、天保銭てんぼうせんでいいかな」

「ええ、でも——」

「ああ、もちろん、それがしも天保銭の値打ちは知っている。安心してくれ」

「はい、でしたらどうぞ、お渡しください」

その受け答えを聞きながら、辰蔵はどういう顔をしてよいか困ってしまい、店先から通りをながめるふりをした。

先頃さき頃、幕府が財政難の打開を狙って発行した天保通宝（百文）は、質も悪く、大量に鑄造されたため、誰も額面通りの百文では引き取ってくれないのだ。

つまり、百文のものを買うには、天保銭に、もう十文ばかりつけないと世間では通用しなかった。このため「百文にちよつと足りない天保銭」とからかわれ、少し抜けている人間を指して天保銭と呼ぶ風潮も現れているほどだった。

だが、お上の御用を預かる十手持ちとしては、天保銭の値打ちを百文にするように徹底させなければならない。

そこで、こういう時、辰蔵は一番楽な方法をとる事にしていった。

つまり、見て見ぬ振りをするのだ。

辰蔵の仕えている謹厳実直な南町奉行、矢部定謙様も、これならば見逃しても文句はいわないに違いない。

いや、ざつくばらんな北町奉行、遠山様なら、それだけの値打ちしかねえもんは仕方ねえじゃねえか、とさえいうかもしれない。

そう思いながら、支払いの済んだらしい新重郎へ向き直った時、通りで騒ぎが起こった。

何人もの男女が、何事か叫びながら店の前を走っていく。

十手持ちである辰蔵は、咄嗟に店を飛び出した。

「おうおう。いったいどうしたってんだ」

通りを駆けていく職人風の男を捕まえて辰蔵は尋ねる。

「若い女が日本橋川に飛び込んだんだ。それがどうやら、この先に住んでる女だって聞いたんでな、身内に知らせにいくのよ」

いつものように、辰蔵が十手を隠しているために、男は気兼ねのない口をきいた。

「また、どうして」

「おめえも知ってるだろう。最近、お上の儉約のお達しが癪にさわった娘たちが、こつそりと絹の襦袢じゅばんを着るのが流行ってるってのをよ。それを調べるってんで、まむしの仁吉が、道行く女の服をはぎ取ったのよ。まったくひでえことをしやがる」

まむしの仁吉とは、辰蔵と同業の岡っ引きだ。

いわゆる嫌われる十手持ちの典型で、やり口があこぎなことで知られている。

「それで、その女は耐え切れねえで川に飛び込んだってわけよ」

そうか、と辰蔵が男に答える前に、風のように素早く何か脇を駆け抜け

ていった。

振り向くと、通りの遙か向こうを矢野新重郎が駆けていくのが見える。

「だ、旦那」

叫びながら辰蔵も慌てて駆けだした。

走り始めて驚いた。

辰蔵も、いいかげん足の速いほうだが、新重郎は、とんだ韋駄天いだてんだったのだ。

賢明に追いつがっているにも関わらず、一向に新重郎に追いつけない。それどころか、たちまち半町ばかり離された。やがて、辰蔵は息が苦しくなり顎があたりはじめた。とうとう走り続けるのをあきらめ、歩き始めた。

よろよろと歩きながら、辰蔵は、新重郎の住まいが、さつき男のいつていた方角だったことを思い出していた。

日本橋川につくと、すでに騒ぎは収まっていた。

川から引き上げられた女は、今は上から衣服を掛けられ落ち着きを取り戻している。

辰蔵の知らない顔だった。

娘は、何人かに抱きかかえられるようにして、近くの料理屋に連れて行かれる。

その姿を、呆然とした様子で新重郎は見送っていた。

「旦那、いったいどうしたんです？」

「なんでもない」

だが、辰蔵は新重郎の真つ青な顔を見た。

なんでもないわけがなかった。

「旦那、ひよつとして奥様と間違われたんで」

「うむ。実をいうとそうなのだ。人違いでよかった」

人違いで良かった、それがどういう意味で発せられた言葉なのか、その時

の辰蔵にはわからなかった。

それほど裕福な暮らしをしていないゆきが、隠れて絹の下着を身につけているとは思えないし、お上への反発だけで、そんな無分別なことをするようにも見えなかった。

つまり、新重郎の言葉は、ただ、奥方が人前で肌をさらさなくてよかったということなのだ、その時の辰蔵は思っただけだった。

まだ顔色の悪い矢野新重郎と別れ、長谷川町、三光稲荷前さんこうの家に向かって帰りながら、もう、あの浪人と会うことはないだろう、と辰蔵は思った。

ということは、あの美しい奥方に会うこともないのだ。その考えは、なんとなく辰蔵を残念な気持ちにさせた。

——いけねえな。俺も早く身を固めたほうがいいのかもしれないねえ。

何気なくそう考えた自分に狼狽し、突然、舌打ちしたいような気持ちになった辰蔵は、道の石を蹴った。

「あいたつ」

大声で叫んで、道にしゃがみ込む。

どうやら、道に転がっていると見えたのは、石ではなく、地面に埋まった岩が、その先を表に出していたものようだった。

世の中の出来事にも、同じようなことがよくある。

一見、なんでもないような出来事だと思つて軽く扱うと、その下には、到底とつていひとりでは持ち上げられないほどの難問が埋まっているのだ。

「畜生」

辰蔵はつま先をさすりながら立ち上がった。

よろめきながら歩き出す。

通りの端で、若い娘が二人こちらを見て、くすくす笑いをしているのが目に入り、辰蔵はよろめきつつも、胸を張って近くの自身番まで歩き続けた。

もう会うことはないだろう、辰蔵はそう思っていたのだが、実際は、すぐに矢野夫婦と再び会うことになったのだった。

翌々日、新重郎の寺子屋に通う子供が、行方知れずになったのだ。

届けを受けた番太郎が町廻りの北町同心、早川右近へ知らせ、右近が辰蔵に指示を与えた。

辰蔵は早川右近からの手札を受けているのだ。

拐かされた子供の名前は与一といった。

大工の磯吉の息子だ。

「いつてえどうして、俺の息子が、かどわかしになんぞあうんだ？」

辰蔵の調べに、磯吉は、涙まじりにため息をついた。

「まあ、あまり心配しなさんな」

慰めの言葉をかけて、辰蔵は磯吉の隣に腰掛けた。

このたくましい体つきをした大工について、あらためて調べる必要はなかった。

磯吉と辰蔵は、以前からの顔なじみなのだ。

居酒屋で、たまたま一緒になって、酒をやっている時に、身の上話はひと通り聞かされている。

例によってその時、辰蔵は十手を隠していた。

十一の年から久松町の力造という大工の見習いに入って二十年。身を粉にするどころか、苦勞という水に溶かして流すような辛苦に耐えて、やっと独り立ちして大工としての名が売れ出したのが三年前。

辰蔵の知る限りでも、裏のないさっぱりとした気性で、短気なために喧嘩はするが非道はしない男だった。

どう考えても、一粒種を拐かされるほど、憎まれる相手がいるとは思え

ない。

腕が良いとはいうものの、磯吉は酒好きが祟^{たた}つての貧乏^{びんぼう}所帯^{じょたい}、強請^{ゆす}り取られる金など家にはないのは皆が知っているはずだから、金目当てでもないはずだった。

磯吉の住む長屋を出た辰蔵は、頭をひねりながら矢野新重郎の家へ向かった。

例によって、下駄屋の裏木戸からおとないを入れると、おゆきが現れた。

おゆきは、辰蔵の顔を見ると、すぐに奥へ引つ込み、かわりに新重郎が顔を見せた。

「やあ、親分」

「手習いのほうは、よろしいので」

九つ（正午）になるのを見越してやっては来たのだが、一応そう尋ねた。

「お気遣い痛み入る」

新重郎は軽く頭を下げた。

そして、そろそろ時分どきであつたので、朝の手習いの子供たちは、さきほど家に帰したのだといった。

あのようなことがあつたので、家族の者も迎えに来ているし、それ意外の者も誘い合わせてまっすぐに家に帰るように諭^{さと}した、という。

「残った子らも、おいおい帰っていくでしょう」

新重郎は、そういつて腕を組み、黙り込んだ。

部屋の奥から子供の声が漏れ聞こえてくる。

それがだんだんと静まって、やがてすっかり静かになった。

皆、家に帰ってしまったのだろう。

玄関を通る子供が一人もないのは、辰蔵の通される飛び石の道とは別の、子供たちの通う道があるに違いない。

「旦那」

「わかっておる。が、わたしには何もわからんぞ」

「まだ何もいってませんよ」

「いや、おぬしの考えはわかる」

「どうお考えで」

「磯吉は真面目で腕は確かな大工だが金はない。それは皆が存知おる。ということは金子が目当ての拐かしではないということだ。また、磯吉は喧嘩っ早い腹には何も無い男、深く恨まれるということもない。つまり、親の因業がもとの誘拐でも無い。あんたはそう思ったのだろう。では、親の次に拐かしで困るのは誰だろうか？それはわしということになる」

「違いますんで？」

「その通りだが、わたしにはまるで心あたりがない。困ったのう」

新重郎は、そういって、角張った顎から、ところどころ飛び出ている無精髭を引き抜いた。

「申し訳ありやせんが、しばらく、この家の廻りをうろつくことになります。なにぶんお役目ですので、どうかご勘弁を」

辰蔵は軽く頭を下げた。

だが、辰蔵はこの浪人を疑っているわけではなかった。

長年の勘でそれは分かる。

矢野新重郎には、悪事に関わっている者特有の「匂い」がしなかった。

それは、腸の奥からしみ出るような、隠しようのない匂いなのだ。

頭を上げて、あらためて新重郎を見た辰蔵は、おや、と思った。

落ち着いた言葉を聞いている時は気がつかなかったが、新重郎の顔色がひどく悪い。

普段から血色の良い男では無かったが、今は、青黒くくすんで見えるほどだ。

おかしい、と思ったものの、辰蔵は、さらぬ態で続けた。

「子供が旦那の家からの帰りに拐かされたのは確かなようですんでね」

新重郎は頷いた。

「浪人は、武士といえども町方の扱いになる。そのことに異存はないし、与一を見つげるために、わしにできることならなんでもするつもりだ」

「頼みますよ。それで、もし捕り物になった時には手伝っていただきやすよ。

何せ、あつしひとりじゃ心細いですからね」

「十手を預かる親分が頼りないのう」

「なあに、あつしは、いつも独りで動きますんでね。目星をつけるところまではいいんだが、いぎ、ひつくくるとなると、いつも冷や冷やなんですさ」

そういつて辰蔵は袖をまくり、幾重にも重なった刀傷のあとを見せる。

「ほう、独りでなあ。さすれば親分は十手持ちとしては凄腕のようだの」

「どうしでやす」

「上というものは、いや、ともかく人を使うものは、手下を手の届くところにおいて、こと細かく命令したいものだ。独り働きを嫌うのだな。その手を離れ、独りやりたいように探索できるといふことは、それを認めさせるだけの力が、あなたにはあるということだ」

辰蔵の頭に、同心、早川右近の若々しい顔が浮かんだ。

今年二十二になる右近は、自分より長い経験をもつ辰蔵を信じて何事も好きにさせてくれている。

「しかし親分、悪いが、わしは剣術の方はまるで駄目だな。そつちは当てにせんでくれよ」

「へい」

だが、辰蔵は、その言葉を、そのまま信じたわけではなかった。

捕り物の時に身を守るため、辰蔵は三十近くなってから一念発起して神田にある心象流の道場に通い始めた。

期待もせずに始めた剣術であったが、思いの外筋が良かったのか、めきめきと腕を上げ、今では目録もくろくまでもらうようになっていた。

そんな辰蔵の目からみれば、この浪人者の腰の据わり方は尋常ではない。矢野新重郎の身のこなし、体裁きは、一流の芸を身につけている身のこなしだったのだ。

次の日も辰蔵は矢野新重郎を訪ねた。

今度は、ゆきは出てこずに、直接、新重郎が顔を見せる。

「おや、奥方様は？」

「ゆきは、梶ノ森すぎのもりいなり稲荷で炊き出なのだ」

「炊き出し」

「火事で焼け出されたりして飯にありつけぬ者たちに施ほどこしているのだ。毎月一のつく日は、いつもそうだ」

「驚きましたねえ。あの奥方さまが」

「性分なのだ。困っているものを見ると何かせずにはおれぬらしい。最近は、大きな火事が無いから、回数が減っているのが」

「立派なことです。実際、これほど……」

貧乏をされているのに、といいかけて、辰蔵はあやうく口を閉じ、顔をのりとの撫でた。

「しかし、奥方さまは不思議なかたですね。武家育ちのような気品をお見せになることもあれば」

「町娘のようなどころもある、か」

ふっと新重郎が笑った。

「め、滅相めっそうもない」

「気にされるな。親分がそう思うのも、もったいなことだ。もう気づいてい

るだろうが、ゆきは武家の出ではない」

「そうですかい」

「うむ……」

新重郎が、それ以上は話したくなさそうなのを感じ取って、辰蔵はいったん話をそらせた。

「ところで、旦那はどここの生まれですかい。江戸の生まれでないってことは

……」

「わかるか？」

「へえ、お国訛くになまりでそう分かります」

「まこと訛なまりは国の手形とはよくいったものだ。抜けぬもののだ」

そういつて笑い、大和の国だ、と続けた。

「なある。それで槍がお得意なんですね」

いつてから辰蔵は鋭く新重郎の顔を見た。

「なぜそれを」

新重郎が顔色を変えた。

「どうか、お怒りにならないください。あつしだつて、素人なりに剣法はやった方ですんで、旦那の腰の据わった身のこなしをみて、武芸ができないとおっしゃった言葉が信じられなかったんです。で、かどわかしの調べのついでに、岩太郎という子供の親に話を聞いたところ」

「両替屋りようがえやの殖生屋はにゆうやだな。幸兵衛か」

「そうです。殖生屋は両替商としてはそれほど大きくはありませんが、やはり金貸しは金貸し、どこかで恨みをつけていたようで、この夏の祭りの夜に、浪人連中からまれたそうですな。そこへ旦那が通りかかり、転がっていた竹を手にして、またたくまに七人ばかりを追い払ったと申しております。まるで鬼神のようであったと、それはもうえらい褒めほようでしたよ」

「口の軽いやつだ」

「槍術やうじゆつといえは、やはり宝蔵院流ほうぞういんりゆう。とくれば大和の国です」

辰蔵の言葉に新重郎は軽く頬を歪めた。

「太平の世に槍など何の役に立とう」

「ですが、いざ戦えば刀は槍にかないません」

何年か前の捕り物で、盗人が、槍術を使う用心棒を雇っていたことがあった。

その時、たった五人の捕り物に、三十人もの怪我人と死人を出したのだった。

あの時ばかりは、さすがの辰蔵も、唸りを上げて頭上を回る槍の穂先を幾晩か夢に見たものだった。

「わしも、若い頃は槍の鍛錬に精進したこともあった。だが、そんなものは、世知辛い世で生きていく上で、何の役にも立ちはせぬ。今、それがし自身を助けているのは槍ではなく小柄だ」

それは七房楊枝の細工刀のことだろう。辰蔵はうなずいた

番屋への帰り道、辰蔵は眉間に皺を寄せて歩いていった。

おゆきの行いについて、なにかしつくり来ないものを感じていたのだ。

自分でも何がひっかかっているのかはわからない。

もちろん、顔かたちのよい女の心根がすべて冷たいとは思わない。

だが、女子の場合、美しくなるにつれて気性が冷たくなるというのはよくあることだ。辰蔵は経験から知っている。

だが、矢野の奥方は、美しく、仏のように慈悲深いときている。

辰蔵の半生を振り返っても、これはめったにないことだった。

仏のように？

何気なく頭に浮かんだ言葉であったが、それは辰蔵の心を妙にひっかいた。

こういったひっかかりに対する自分の勘働きが正しいことを老練な岡っ

引きは知っている。

いったい何だ。辰蔵は自分に問いかけた。わからない。

ただ、仏という言葉と、ゆきとが、なんとなく相容れないような気がするのだ。

仕事柄、世の中の裏側を見すぎた辰蔵は、人が人のために尽くすには、善意だけでは足りないことを知っている。

彼の知る限り、そういった無欲の行為を行うものは、すべて仏に縁のある者だった。

だが、ゆきと仏はどこか合わない。

この気持ち悪さは何だろう？納得がいかないまま辰蔵は歩き続けた。

だが、結局、彼の考えは正しかったのだ。

表に見えたゆきの慈悲深さは、地面に現れた石の穂先に過ぎなかった。その下には、大きな暗い岩が隠れていたのだ。

次の日の朝、拐かどむかされていた与一の軀むくろが出た。

朝靄あさぎりの流れる大川に浮かんでいたのだ。

すっかり冷たく白く、堅くなったその体には、首筋に深々と切り裂かれた跡があった。

しゃがみ込んで傷を見た辰蔵は、それが薄く小さい刃物によってつけられたものであると確信する。

「与一！」

叫びながら野次馬をかき分け、泳ぐように磯吉が走り寄ってきた。

「いつてえ誰がこんなことをしやがった。与一、よいち」

地面を叩いて泣き叫ぶ磯吉から顔をそむけた辰蔵は、ゆるやかに波打つ川面を見つめてつぶやいた。

「まさか……」

辰蔵の頭の中では、与一の傷と小柄を薄刃に研ぎ上げたという楊枝作りの

刃がぴったりと重なっていた。

さらに数三日が経ったが、下手人の探索は遅々^{ちち}として進まなかった。傷口が、楊枝作りの道具によるものかも知れないと疑った辰蔵だったが、そのことですぐに矢野新重郎自身を疑ったわけではなかった。

その程度のこと浪人とはいえ武士を番屋にしよっぴくわけにはいかない。

それに、辰蔵の勘では、やはり下手人が新重郎だとは思えなかったのだ。だが、与一の骸が見つかって四日後に、辰蔵は意外な噂を耳にしたのだ。

「矢野の旦那が江戸を出ようとしているだと」

「へえ」

最初に新重郎の住まいを探して尋ねた楊枝の卸元、世左右衛門が頷いた。「昨日、うちに見えられた時に、そのようなことをおっしゃっていました。いえ、そうはつきりとは申されませんが、この間話していた、楊枝を納める話は無かったことになって欲しいとおっしゃりましたので。それに、下駄屋の主からも家移りの話があったことを聞いておりますんで」

「お邪魔しやす」

辰蔵が訪ねると新重郎は家にいた。

「おお、親分。よくきた」

「世左右衛門に会って来やした」

それだけで、勘のいい浪人は辰蔵のいいたいことを見抜いたようだ。

「江戸を出ることじゃな」

「旦那、今、旦那を江戸から出すわけにはいきやせんぜ」

「なぜだ」

「旦那にやあ、おわかりのはずだ」

「やはり、わしを疑っておるのか」

「そんなことは毛ほども思っっちゃおりやせん。ですが、あの与一の刃物傷」

「確かに、あの傷は、わしの楊枝作りの小柄で作ったものに似ている」

「御存知だったんで」

「与一はわしの手習いの子だ。おまけにここから家に帰る途中に拐かどわかされておるのだ。知らん顔などできまい。あの時も子供の軀が上がったと聞いて、すぐに大川縁まで走った。親分が軀を検分しているのを後ろから見せてもらったよ」

「じゃあ、あつしのいいてえことは、おわかりでしょう」

「親分は何としても下手人を上げねばならぬ、その為に怪しそうな者は、ひとりたりとも他所よそには出せぬ、というわけだな」

「へい。与一殺しの下手人をひっくるるまで、旦那と奥様を江戸から出すわけにはいきやせん」

辰蔵の、威圧を感じさせるものいいに新重郎は動ぜず、

「親分は、今度の拐かしを金のためだと思っておるのか？」

「いいえ。前に旦那がおっしゃったように、磯吉に金はごぜえません」

「では、怨みか」

「だいたい、そうなるうかと」

「磯吉か、わしに対する怨みだと考えておるのだな」

「手習いに通っている子供たちに聞いてみても、与一は、ここと長屋をまっすぐ行き帰りして、あとは長屋の近くで遊ぶだけだったと申しておりやす。とくに拐かされた日は、ここを出てすぐに行方知れずになっておりやすんで」

「それで、わしを疑うか……あるいは帰りに誰かに声をかけられたか、だの」

「磯吉も子供たちも、与一は声をかけられたぐれえで、ほいほいついて行く

ようなことはないといひやす」

「そうだろう。与一は賢い子供だ」

「なあ、親分。金でなければ怨み、それは大人が殺される理由ではないか」

「おとな、ですかい」

「親分。さつきもいったが、与一はわしの手習いのひとりだ。あの子のことはよく知っておる。この間、文の書き方を教える折り、字の練習を兼ねて、いろいろと書かせてみたのだが、与一は大工の仕事について、事細かに書くことができた」

「それで？」

「与一は大工の仕事が好きでならなかったらしい。目の前で、ものがどんどん出来ていくのを見るのが楽しくてならない、そういつておった。もつとも、職人に学問は必要ない、という者が多い大工には珍しく、磯吉は倅に手習いをさせることに熱心で、無理に自分の跡を継がせる気はなかったようだが」

辰蔵には、新重郎が何をいいたいのか分からなかった。

納得できない様子を見て浪人は言葉をつぐ。

「その書き物で、与一は、よく父親の仕事場に顔を出しては叱られていたと書いていた。磯吉の考えでは、まずは学問をせよというわけじゃな。しかし、与一は、それに懲りず、何度も、あちこちの普請場に顔を出して、こつそり大工仕事を見ていたようだ。たくさん的人数で行くと見つきりやすいから、だいたいは、ひとりで覗いているのです、と書いておった」

あつと、辰蔵は声をあげそうになった。

「つまり、与一には、寺子屋と長屋の近く以外に、下手人と出会う場所があったといひなさるんで」

新重郎は頷いた。

「それが、手がかりになるかどうかは分からぬが、親の恨みつらみから下手

人を追いかけるのではなく、子供自身の動く場所から下手人を探すのも悪く
なからう。金目当てではなく、子供自身を欲する拐かしもある。例えば、子
供に不幸ごとがあつて、最近、家を普請ふしんしたような者を探してみるのも手で
はないかな。親分は、生きていた頃の与一を見てはおらぬだろうが、あれば
利発で美しい子供だったのだ」

「亡くした子の代わりに親が欲しくなるような」

「そうなの」

「わかりやした」

辰蔵は駆けだしていた。

新重郎の読みは当たっていた。

与一の父親、大工の磯吉が手がけた仕事先で、最近、子供を亡くしたり、
怪我をさせたりした者を調べたところ、ある家が浮かんできたのだった。

だが、辰蔵の気持ちは重かった。

その結果が、辰蔵にとって満足のいくものではなかったからだ。

大工の磯吉に聞いてみると、この三月みつきで普請をした家は三軒だった。

最初の二軒は、本町にある漬物問屋、奈良屋と樽屋たるやだが、これは、どちら
も子供の不幸ごとなどなかった。

身代もすっかりしているし問題はなさそうだ。

三件目は三善屋だった。

その名を聞いた時、辰蔵は真つ先に下手人から外そうとした。

おみつが、そんな大それたことをするとは思えなかったし、第一、子供が
絡んだ不幸ごとなど三善屋ではなかったからだ。

だが、お上から十手を預かる身の辰蔵が、思いこみだけで動くわけにはい
かない。

辰蔵は三善屋が普請していることを知らなかった。

例によって、人の目を気にし、店先の、使用人たちに見える場所でおみつと話をするだけだったからだ。

——だが、おみつが普請を俺に隠していたとは思えねえ。

おそらくは特にいう必要がなかっただけなのだ。

しかし、どこか頭の奥で辰蔵にはひっかかるものがあったのだ。

それが何かわからない。

考え込むうち、辰蔵は馬鹿馬鹿しくなって笑い出した。

なんの事はない、おみつ自身にさつさと尋ねてみればいいのだ。

あいつなら、馬鹿だね辰つつあん、といって、すつきり分かる説明をしてくれるに違いない。

ひとつ走り三善屋に行ってみよう。

そう思っつて、辰蔵は、番太郎に命じて持って来させた水をぐびりと飲んだ。

生ぬるい水のために、いきなりむせて吹き出す。

途端に、ぱっと頭に閃くものがあった。

この間、会った時に、おみつはいついていたではないか。

(あたしも子供が欲しかった。物心がつくまえの子供が)

それに、あの時、おみつは辰蔵に麦湯をだしながら、暑くなるとお茶を欲しがるからねえ、といつていた。

てつきり子飼いの、櫛職人が茶を欲しがるのだと思つていたが、あれは普請を見に来る子供のことではないのか。

辰蔵は、再び頭を殴られたような気がして、手にしていた湯飲みを地面の落として割ってしまった。

番太郎に詫びをいつて番屋を後にする。

それに、あの与一の首についていた刃物傷。

ああいつた傷をつける薄刃の刃物が、三善屋にもあることを思い出したのだ。

「邪魔するぜ」

三善屋は、いつもながら盛況だった。

「ああ、親分」

上品そうな老女の相手をしていた番頭の卯吉うきちが挨拶を返す。

「おみつはどこだい？」

尋ねると奥の間にいるという。

辰蔵は、ずっと部屋に上がると、廊下に出て奥の間に向かった。

家上がるのは、ずっと前に見舞いにいった時以来だ。

仏間におみつがいた。

気配に振り返って、辰蔵を見て微笑む。

「どうしたんです。辰蔵親分」

「いや、なんだ。お前にな、ちよっと聞きたいことがあってな」

「なんです」

「正直に答えてくれよ。おまえは、与一って子供を知っているか」

「ええ、知ってますよ」

「本当に」

「大工の磯吉さんの子供でしょう。おとつつあんの働いているところが見た
いんだって、よくうちに来てましたよ」

「そうかい。じゃあ、その与一が殺されたのを知ってるかい」

「知ってます」

——じゃ、どうして、与一がここに来ていたことをいわなかった。殺しの
あとも、俺はなんどもここに足を運んで話をしていたじゃねえか、と、喉ま
で競り上がってきた言葉を飲み込んで、辰蔵は尋ねた。

「よし、じゃあこれが最後だ。おみつ、おまえ、まさか与一を殺しちゃいね
えよな」

「ああ、やりましたよ」

事もなげにおみつが答えた。

「何だって」

「あたしがやったんですよ。親分」

あまりにあっさりしたおみつのいっぴりに辰蔵は呆然となった。

「おい、おみつ、いい加減なことをいうもんじゃないぜ。ことは人殺しなんだぜ」

「本当なんですよ、親分」

「なぜだ」

「先達で親分にいったでしょう。子供は物心つかないうちから育てないといけないって」

「与一はもう八つだったぜ。利口な子供だったから、物心はおろか分別すらつき始めてたって話だ」

辰蔵の言葉に、何がおかしいのか、おみつはころころと笑った。

「いいんですよ、年はね。とにかく、あの子は賢かしこくて聡さとかったから、うちの子供にしたかったんですよ」

「お八重はどうなるんだ」

「お八重」

そういつて、おみつは遠い目をした。

「あの子は駄目ですよ」

「おい、おみつ、お前は、いったいどうしちゃったんだ」

「あの子はね、せつかく出来た子供を」

「お八重に子供ができたのか？」

「出来てませんよ」

「どういふことだ？」

おみつは斬るように言葉を発した。

「中条流にかけたんですよ」

「なんだったって？」

辰蔵は大声を出した。信じられなかった。

お八重は、自分の子供を、おみつにとっては初孫を墮ろしたというのだ。

「いったい何だったって」

「あたしが悪いんでしょうよ。あの子がそういったから」

「分かるように話してくれ」

「あたしが、あんまり小さな子供が欲しいっていうもんだから、あの子は、あたしが子供を取り上げてしまうと思っただんでしょね。せつかく産んだって取り上げられるくらいなら、いっそ自分の手でってね」

「馬鹿な。おまえがそんなことをするわけがない」

「あたしもそういったんですよ。でも、あの子は聞く耳を持つちやいなかった。あたしに何もいわずに子供を墮ろして。それで、いうことがいいじゃないですか。おっ母さんのおかげで、あたしは大事な子供を殺してしまった。あたしの子供を返せってね」

そういつて、おみつは泣き笑いの表情になった。

「今、お八重はどこにいるんだ？」

「矢三吉やさきちの実家に行ってます。よっぽど中条流がこたえたんでしょよ」

矢三吉とはお八重の亭主で、今は三善屋の主だ。

三善屋の手代だったが、もともとは浅草吉川町の小間物屋、美倉堂の三男坊であるから、お八重はおそらく美倉堂にいるのだろう。

「なんだったって、ひとさまの子供を欲しがったりしたんだ。お前だって、子供のひとりくらいまだ作れただろうに」

「おや、辰つつあん。もし、あたしが頼んだら、あんたがその子の親になってくれたんですかい」

そういつて、おみつは緩んだ顔で笑った。

「誰がこんな年増に子供を授けてくださるっていうんです。死んじまったあの人ですか。観音様ですかあ？もう遅いんですよ。遅い遅い遅い……」

惚けたように囁きつづけるおみつを見て、辰蔵の背筋にさざ波が走る。

明らかに、おみつの心は壊れ始めている。

「与一ちゃんは可愛かった。あたしになついてね。寺子屋の帰りに、お父っつあんの仕事を見に来ました、っていつて。お父っつあんに見つかると叱られるからこっそりきました。いいつけないでくださいね。誰が告げ口したりするもんか。あたしは、あの子と話をしたんだ。良い子だったよ。お八重とはまるで違う。でも、夕方になると家に帰りたいって泣き出してね。あたしは思ったんですよ。この子をこのまま帰したら、みんないなくなつて、あたしはひとりぼっちになってしまつて」

「それで、職人が店に置いてある櫛削り用の薄刃で、与一の首を切ったのか」
「奥の部屋が天井まで真っ赤になつてねえ。親分、知ってるかい。体から吹き出たばかりの血つてのは、暖かくなんかないよ。熱いんだよ」

おみつの目は熱に浮かされたように潤んでいる。

「あんまり顔が血まみれになつたから、夜のうちに裏の川で与一ちゃんを洗つてやつたんだよお」

三善屋の裏には、大川につづく吉田川が流れている。そこから川に流された骸が、大川に流れていったのだろう。

「おみつ、俺はお前をしょつ引きたくなんかない。出来たら自首してくれねえか。俺が番屋までついてやってやるから」

おみつは上気した顔のまま頷いた。

せめて化粧をして番屋に出向きたいという言葉に辰蔵は頷き、奥の部屋に引っ込んだおみつを待った。

だが、いくら待ってもおみつは戻つて来なかった。

物音ひとつしなないことに不安を感じた辰蔵は、襖を蹴り開けて、奥の部屋に飛び込んだ。

そこは一面、あざみの花が散ったように深紅だった。

ところどころ、どす黒くなっているのは、与一の血であろう。

部屋の真ん中で、首から上を深紅に染めたおみつが座り込んでいる。

手には、血に染まった櫛削り刃を持っていた。

「おみつ」

叫んだ辰蔵は、おみつに飛びついた。刃物を取り上げ、手ぬぐいで首の切り傷を押さえる。

「医者、医者を呼べ、外科だ」

襖を蹴り倒す音を聞きつけて駆けつけては来たものの、部屋をのぞき込んで、血しぶきの多さに腰を抜かしている番頭に向かって辰蔵は叫んだ。

「辰つつあん、堪忍ね」

弱々しい声で、おみつがいった。

「あたし、小伝馬町のお牢がどんなだか知ってるんだよ」

へへ、と照れたような笑い声をたてる。

「わ、若い頃にね。うちの亭主と会う前に」

「黙ってろい、おみつ」

「あそこには、もう行きたくないんだよ。ね、いいだろ。行かなくてさ」

「おみつ」

手ぬぐいがみるみる赤く染まり、抱きしめるおみつの顔が冷たくなっている。

「おみつよお」

やがて、耳元で叫ぶ辰蔵の声も、もう聞こえない風で、おみつはにっこり微笑んだまま死んでいった。

その日の夕刻。

人気の無くなった番屋に辰蔵はいた。

「これで、俺は独りになっちまった」

むしろのかかったおみつにそう呟くと、辰蔵は江戸の町に足を踏み出した。すべてが夢のようで、ぼんやりと宙に浮いたように気持ちいが定まらない。

辰蔵の足は、自然と小泉町にある矢野新重郎の家に向かっていた。

裏木戸に近づくと、戸は薄く開いていた。

まだぼんやりとしていた辰蔵は、何気なく扉を開け庭に足を踏み入れた。

飛び石の向こうで、おゆきがしゃがみ混んでいるのが見えた。

立ちくらみでもしたのか、と慌てて近づこうとした刹那――

辰蔵は、あ、と声に出さずに叫んでいた。

ほんの一瞬ではあったが、ゆきが額にあてて、懸命に祈っていたものが、きりしたんが拝む「くろす」であることがわかったからだ。

辰蔵は、雷に打たれたように、それまでのおゆきの一連の行動の理由がわかった。

バテレンとも呼ばれるきりしたんは、人に献身的に尽くすと亡くなった父親から聞いていた。

宗門改め方の勢いのあったころは、踏み絵と称する試しにかけられ、多くの隠れきりしたんが死んでいったそうさ。

獄門磔。

それが、キリシタンと、それに関わるものを待つ運命だ。

五十年前の寛政四年（一七九二年）に宗門改役が廃止になったとはいえ、その罰は変わらない。

辰蔵に見られているのも知らず、ゆきは立ち上がると部屋に入り、引き出しを開けて、くろすをその奥の壁にはめ込んだ。

炊き出しの準備をするためか、急ぎ足で家を出て行く。

咄嗟に植え込みに隠れた辰蔵の前を、軽い足音が走り去った。

今、目にしたものの持つ意味の大きさに、辰蔵はしばらく立ちあがること
ができなかった。

「親分。あんた見たな」

迂闊うかつにも、あたりに気を配ることを怠っていた辰蔵に、頭の上から声が降
ってきた。

見上げると、上背うわせいのある矢野清十郎が懐手で辰蔵を見下ろしている。

「へえ。見てしまいやした。そんなつもりはなかったんですが」

「そうか見たか……」

清十郎の顔は悲しげだった。

「親分、まずは家に入ってくれ」

「旦那」

「頼む」

静かなものいいであった。

だが、そこには押し殺したような迫力があつた。

新重郎の腕のほどは先刻承知している。

とても、町人の手なぐさみが及ぶところでない。

辰蔵は、促されるままに離れに入った。

上がりがまち框に腰を下ろすと三尺離れて新重郎が座つた。

長い間、新重郎は口を開かなかった。場の空気の重みに耐えかねて、辰蔵
が尋ねる。

「いったいどうしておゆきさんは、ばてれんに？」

「……あれは長崎の生まれだ。向こうの遊郭で太夫を張った女が母親らしい。

まあ、後に事情があつて出島の遊女になったらしいが」

「出島」

ある事情から、辰蔵は長崎のことをよく知っていた。

出島といえは、日本で唯一、南蛮人が滞在をゆるされた場所だ。

三代家光公の鎖国以来、役人以外は、そこから出ることも、入ることも許されていない。

唯一の例外は長崎の遊女たちである。出島の入り口から向かって左端に、遊女部屋が置かれてあり、女たちは、毎日そこへ通ったらしい。

出島といわれて、辰蔵がすぐに思い出すのは、おらんだ人医師しいぼるとだった。

しいぼるとと長崎の遊女、其扇そのおんせんも遊女部屋で出会ったらしい。

文政六年（一八二三年）、今からおよそ二十年前のことだ。このあたりの話を、当時二十前の血気盛んな辰蔵はよく覚えている。

なぜかというと、三年後の文政六年、しいぼるとが江戸に来た時、宿にした長崎屋を見張るようにと父に命が下ったからだ。

なんでも、上様にとって大切な客であるしいぼるとを、水戸家の家臣が狙っているという噂があったからだそうさ。

当時、まだ父親との溝が深まっていなかった辰蔵は、連日、長崎屋の廻りを父について歩き回った。

そして、そこに集まる蘭方医や蘭学者から、しいぼるとのこと、出島のことを聞きかじったのだった。

実際、辰蔵は、何度かしいぼるとの顔を見たこともある。

役者なみに大振りなその顔は、どういうわけか傷だらけであった。

その後、しいぼるとが、日本の地図を持ちだそうとして失敗したり、大阪の陽明学者、大塩平八郎が乱を起こした頃は、ちようど三善屋に転がりこんでぶらぶらしていた時期なので、その内容をはっきりとは知らない。うわさ話と、時折、落書される川柳によって知っているだけだ。

「じゃあおゆきさんは、異人との——」

「いや、父親は異人ではないらしい。だが、母親が異人との間にできた子供だったそう。長崎では、そういう子供も珍しくないため、普通に生活できるそうだが」

そういわれて初めて、おゆきの尋常でない美しさに合点がいった。あの肌の白さと目の大きさは、下手をすれば、化け物顔といわれかねないほどだ。「すると、異人の血が混じっているから、おゆきさんは、きりしたんになっただんですかい」

新重郎はゆっくりと首を振った。

「いくら五十年前に、宗門改め方はなくなってしまうとはいえ、きりしたんであると分かれば獄門だ。ゆきの話では、異人との間に生まれた子供でも、ほとんど、きりしたんはおらぬらしい」

はっと、辰蔵の頭に光が走った。

「旦那。ひよっとして、奥方の体に何か秘密があるんじゃない」

いきなり新重郎は刀を掴んで片膝を立てた。

「なぜ、そのことを」

「考えてみればわかりますよ。旦那は長屋に住んでいる頃から、奥方を湯屋にやらずに行水をさせていた。今度、無理をして離れをお借りになったのも、どうやら、あの離れに風呂がついているからのようだ。いくら奥方がきれいだからって、差配がいつていたように、女連中にまで肌を見せたくないからそんなことをするのはおかしい」

新重郎は、しばらく辰蔵を睨んでいたが、やがて力なくいった。

「親分、あんたは恐ろしい男だ。おそらく、今日のことだけでなく、いずれ、気づいていたろうな」

「奥方の二の腕には、計ったように同じところに火傷の後があった。あれが、もし、わざと焼いたものなら、その理由はひとつしかない」

新重郎は、がっくりと膝をついた

「何かの印、おそらくは刺青を消したんでしょいれずみう」

「そこから先は、わたしが話しましょう」

戸口から声がした。

振り返ると、おゆきが立っていた。

「おゆきさん——」

「親分さん。まずはこれを見ていただきましょう」

そういうと、ゆきは背を向けて、着物の襟を広げ、背中を見せた。

「これは——」

しばらくのあいだ、辰蔵は声も出なかった。

肩から下が少し見えているだけだが、ゆきの背中一面には、色とりどりの絵が描かれていた。

「刺青でやすね。しかし、この絵柄は」

「そう、南蛮画です。しかも、体の真ん中には、大きく、くろすが描かれているのです」

「いってえ、どこのどいつがこんな非道なことを」

絞り出すように辰蔵はいった。

確かに、世の中には、女だてら、といわれながらも体一面に刺青をいれる女が、いないわけではない。

だが、それも絵柄によりけりだ。

天女や弁天の絵ならともかく、どこから見ても南蛮画で、しかも体の真ん中に、消しようのない大きさで、きりしたんの「くろす」が描かれていたら、見つかりでもしたら、すぐに獄門だ。

「物心のついた時には、すでにこの絵はわたしの背中にありました。なんでも、唐人の刺青師に頼んで、出島のおらんだ人が赤ん坊だったわたしにこの絵を彫らせたそうです。そうです、旦那。わたしは、ほんの赤ん坊の時に、母親によって南蛮人に売られたんですよ」

ゆきは睫毛まつげを振るわせた。

「わたしは、どれほど、このくろすを憎んだことか。ですが、それから始まった地獄から比べたら、こんな刺青は、なんということはありませんでした」

「ゆき」

「あなた、どうか、最後まで話させてくださいまし」

「やがて、わたしは大きくなり、女になりました。その頃から、わたしを買ったその男は、毎夜わたしを裸にし、その姿を前にして酒を飲むようになりました。男自身は、わたしに指一本触れないままです。そしてある夜、わたしは、その男の目の前で、男の友人に抱かれました。それは、それまでわたしを父のようにやさしく慰め、優しい言葉を掛けてくれた異人でした。それから、毎日違う男によってわたしは抱かれ続けました。男たちにとっては、出島に通う遊女より、わたしの方が良かったのでしょうか。なぜなら、わたしには、他の女にはない、鮮やかなくろすの刺青がありましたから——」

「ゆき、ゆき。もうよしてくれ」

新重郎の身をよじるような叫びも、今のゆきには届いていないようだった。目を一点に据えて話し続ける。

「そのうちに、わたしを買った男がおかしな振る舞いをするようになりました。酒をいれたギヤマンの入れものを割っては、その欠片で、自分の体を傷つけるようになったのです。」

そしてついある夜、男は、わたしが別の男に抱かれるのを見ながら、手にした剣で喉を突いて死んでしまいました」

ゆきの顔からは、先ほどの憑かれたような熱っぽさは消え、瞳には落ち着いた光が宿り始めていた。

「男が死んで、かわりに船でやってきたのは、悲しそうな目をした老人でした。わたしが、いつものように、その男の前で裸になろうとすると、男はわたしに服を着せ、わたしに謝りました。そして、わたしにこのような刺青を

させた男が、きりしたんのお坊さんであったといいました。阿蘭陀おらんたから、この国にきりしたんを広めに来ているながら、二十年のあいだ一歩たりとも出島から出ることができなかったために、おかしくなってしまうたと。

どうか、わたしの息子を許して欲しい、と。

その夜から、わたしは男に抱かれずにすむようになりました。そして老人によってわたしは神への愛に目覚めたのです。わたしは洗礼を受けて、きりしたんになりました。そして分かったのです。わたしを狂ったように抱いた男たちも、結局は、長い月日をかけてこの国にやってきたあげく、何年もあんな小さな島に閉じこめられておかしくなった、哀れな人たちなのだ」と

「そうだったんですかい」

辰蔵は掠れた声でいった。

「ですが、落ち着いた毎日は続きませんでした。老人が事故で死んでしまったのです。本当に事故だったのかどうかは分かりません。巧みに老人はわたしを守ってくれましたが、男たちは、いつも飢えた目でわたしを見ていましたから。老人がいなくなると、当然のように、男たちは、毎夜わたしを襲うようになりました。だから、わたしは出島を逃げ出したのです。男たちはすぐに役人を呼び、わたしが、きりしたんだと告げました。証拠は背中への刺青だといって」

「その者どもは、手に入らないぐらいなら、いっそ、と思ったのかも知れませんがせんな」

ゆきの境遇の重みに堪えきれず、辰蔵は。ことさら陰気な声を出した。

「その時、出会ったのが、大和の国、郡山藩から長崎に来ていたわしだった。わしは、ゆきを連れて長崎を出ようとした。追っ手は、相当な数だったが、なんとか逃げ切ることができた」

そういって、矢野新重郎は、いつも首に巻いている布を取り去った

首には、ざっくりと大きな刀傷が斜めに走っていた。

「わしは脱藩することになり、その後は、傘を張り楊枝を作りながら、日本中を回り続けている」

辰蔵は大きくため息をつくといった。

「で、どうなさるんで？あつしをお斬りになりますかい？」

本心だった。新重郎は、自分を斬らなければならない。

おゆきの秘密を知ったお上の手の者を逃がすわけにはいかないのだ。

そして、自分は為す術もなく斬られる。いくら町道場に通っているとはいえ、自分の腕が新重郎にかなうとは思えない。所詮は町人剣法なのだ。多寡がしれている。

——しかし、斬られたからって、どうだっていうんだ。

辰蔵は微笑んだ。おみつが死んで辰蔵は生きる気持ちを失っていたのだ。

だが、予想に反して新重郎はゆっくりと首をふった。

「いや、やめておこう。親分。あんたを斬ったところで同じことだ」

疲れた声だった。生きることに疲れた声だ。

おそらく、ひとりなら、この浪人はとっくに自害して果てているだろう。

おゆきのために、彼は生き続けなければならないのだった。

けれど、隠れ続け、逃げ続けなければならぬのもまた、おゆきのためなのだ。

「明日になれば、わたしたちはここを出て行く」

新重郎の言葉に辰蔵は頷いた。異存はなかった。隠れきりしたんは、御定法には触れるかもしれないが、盗人、ころしの下手人とは違う。彼が憎むのは、自分の欲望の為に人を殺め、ものを奪い取るやつらなのだ。

それに、今の辰蔵には、矢野新重郎の気持ち針で刺すようによく分かるのだ。

辰蔵は、笑顔で二人にこう告げた。

「あつしは、これから帰って二日ほど寝ますよ」

その夜、下駄屋から火が出た。

離れではなく母屋からだ。

大人たちが気づいたころには、火元に近い部屋で寝ていた子供たち二人は逃げ遅れ、火にまかれていた。

子供たちを飲み込んだまま家は業火に包まれ、激しい炎が軒を焦がし、炎を巻き上げた。

風がなかったことと、火消しによる手当が早かったために、江戸の町は大^{まぬが}火を免れ、明け方近くに火はおさまった。

翌朝、焼け跡から掘り出された^{たんす}箆の下で、ゆきの^{むくろ}軀が見つかった。

子供ふたりは、ゆきの下で半死半生ながら生きていた。

ゆきは、全身、特に背中が無惨に焼けこげていたが、不思議なことに顔はきれいなままだった。

駆けつけた辰蔵の前で、矢野新重郎はゆきの遺体に取りすがり、歯を食いしばって涙をこぼした。

「きりしたんは自ら死んじやならねえと聞いたことがある。自分が生きていたら、ずっと旦那に迷惑かかる。でも、自分から死ぬわけにはいかねえ。そこで、ゆきさんは、火が出たのを幸いに、といたらなんだが、子供を守って死んじまった……」

喉まで出かかったその言葉を飲み込んで、辰蔵はひとり呟いた。

「これで旦那も、俺同様ひとりになっちまった」

そして、新重郎に近づき、いった。

「名前と違って、ゆきさんの一生は燃え盛る火のように赤く激しい道でしたね。でも、これできっとゆっくり、ぐっすり眠れますよ」

新重郎は顔を上げた。

辰蔵の目を見て小声でいう。

「――親分。ゆきには、もうひとつ別のきりしたんの名前、あれにとつては本当の名前がある。その名でゆっくり眠れるように祈ってくれまいか」

辰蔵は頷いた。きりしたんが、別な名前をもっていて、それを神から授かったものとして大事にしているという話は聞いたことがある。

「おっしゃってください」

「りりん」

辰蔵は目を閉じた。

「りりん」

その名を唱えて成仏を祈る。

一瞬、辰蔵の頭にゆきの顔が蘇った。

その顔は、あでやかに優しく笑っていた。

それにおみつの笑顔が重なる。

(女ってやつあ)

辰蔵はひとりごちた。

(生まれ育ちが違っていて、それぞれが自分じゃ抑えきれない激しく赤い炎を、胸のうちに持っているもんなんだなあ)

そう、そして、きっとその紅蓮の炎は、男の辰蔵が分かるまでには、まだまだ時間のかかるものであるに違いなかった。

辰蔵は空を仰いだ。

まだくすぶっている焼け跡から登る煙が、ゆらゆらと秋空に登っていく。

それを見ながら辰蔵は思った。

その炎は、時々刻々と色を変え形を変え、辰蔵など一生かけても理解すらするところのできないものに違いない、と。

△▽